



中央ウェイ

9月号

途中下車も、道草も

指導教諭 山崎 亜矢

宮本輝の随筆に、「途中下車」という作品があります、二十年くらい前の国語の教科書に収録されていて、授業でよく生徒と一緒に読みました。東京の大学を受験するために友人と二人で大阪から新幹線に乗った筆者とその友人は、京都から乗って来た美しい女子高生と出会い意気投合します。そのことで筆者と友人は一気に受験する気持ちが失せ、「途中下車」してのんびりと温泉につかり、受験したふりをして帰った……というところまでが前半です。前半だけなぜそんなことをするのだろうかと思ってしまうのですが、この随筆の魅力は、思いもよらない展開となる後半にあります。後半を読み終わったあと、「どうしてこんなことになるの？」と複雑な表情を浮かべる生徒と、人生のままならなさについて話したことを思い出します。

私自身も大学4年の時、「途中下車」をしました。教員採用試験に落ち、一般企業に就職することに決め、内定式にも参加したのですが、研修資料などが送られてきて入社が近づいてくると、「何かが違う」、「私が進みたいのはこちらではない」という思いを押さえられなくなってきました。結局、内定を辞退したのですが、周囲の反応は厳しいものでした。私の行動が軽率であり、社会を甘く見ていると思われたのでしょう。「これからいったいどうするつもりなの？」と言われるたびに、自分で決めたことながら心が痛くなり、どうしたらよいのか分からなくなりました。このような状態の私を見るに見かねた大学の先輩からの紹介で、英語の専門学校で働くことになりました。英語を学ぶ日本人の学生を対象に、文章表現や国語に関する一般常識を教えるという授業を2年間担当しました。英語の専門学校のため、日によっては、周りは外国人の先生方ばかりということもあり、英語ができない私は職員室で誰とも話せず過ごすこともありました。言葉の壁の高さや言葉が通じることがどれほど大切なことかをひしひしと感じました。また、思うように授業ができず、情けないと感じたり、教えることが向いていないのではないかと悩んだりすることもしばしばありました。この2年間は自分にとって、いわばチャコールグレーの日々だったのですが、決して無駄ではありませんでした。なぜなら、これまでにないほど自分に向き合い、自分がこの世の中でどのように生きていきたいのか真剣に考えた日々だったからです。自分は本当に教員になりたいのか、自問自答を繰り返してやっと覚悟が決まったように思います。

「しっかりとした目標をもちましょう」「計画的に物事を進めましょう」「一度決めたことは最後までやり通しましょう」。私は教員として、生徒の皆さんにこのように言いながら、でも心のどこかで「どうしても迷ったり、分からなくなったりしたら一回立ち止まっていいですよ。」とささやきたくある時があります。一直線に目標に向かって進めることはとても素晴らしいことです。一方で、一直線に進まず、遠回り、立ち止まったり、休憩したりして進んでいくことも大切なことではないでしょうか。

遠回りをしてみる、道草を食ってみる、疲れたらちょっと休んでみる。このようなことが大事だと教えてくれたのは河合隼雄の『心の処方箋』という本でした。道草が人を豊かにするという文章しかり、忙しいから、無理だからと言わずにやりたいことに取り組むことで心のエネルギーが湧いてくるという文章しかり、私の狭いものの見方を広げてくれた一冊です。「これしかない」「こうしなければならない」ではなく、「これもある、あれもある」「これもよい、あれもよい」と柔軟に考えて進んでいける人生は素敵だと思います。